「信頼構築」のための基本的マネジメント能力の育成

学校教育講座　露口健司

Ⅰ．授業の目的・到達目標

本科目の目的は、開かれた信頼される学校づくりに貢献する教員を育成するため、学校・家庭・地域社会間の信頼と連携の意義・効果・方法についての理解を深めるとともに、信頼構築において必要な基本的マネジメント能力を習得することにある。

到達目標は次の 2 点である。①学校・家庭・地域社会による信頼構築及び連携協力の意義と効果を理解し､説明することができる。②学校・家庭・地域社会による信頼構築及び連携協力を推進するための具体的な課題及び対処法を発見し、説明することができる。

Ⅱ．受講者の特徴

受講者は教育学専修 3 回生 14 名であり、そのうち 13 名が教員志望である。教員志望が大変強く、学習意欲が高い集団である。また、教員志望のすべての学生が、ボランティア等で学校と定期的に関わっており、有意義な体験を蓄積している。ただし、保護者や地域住民との関係づくりは、教育実習等でもほとんど学習しておらず、既習知識が乏しい。丁寧な説明が必要である。

Ⅲ．授業内容・教材

授業計画は下記の通りである。

全 15 回のうち、前半（第 2 ～ 9 回）は学校信頼に関する最新の研究成果を題材としてとりあげている。教材は露口健司『学校組織の信頼』であり、現在、学術図書の出版助成を申請している。この図書の内容をパワーポイントで分かりやすくした内容を学生に提供している。

後半（第 10 ～ 15 回）では、飯塚俊他『信頼でつながる保護者対応』を教材として活用している。これは、学生向けのマニュアル本であり、実践色が大変強い。学生にとっては、大変分かりやすく、また、教員採用試験の学習にもそのまま使える教材である。

信頼構築や連携協力という、学校組織が取り組んでいる重要なテーマを理論的・実践的に探究することのできる授業内容を目指している。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　学校不信の原因
第 3 回　ソーシャルキャピタルの理論
第 4 回　保護者関係マネジメントの発想
第 5 回　保護者・地域住民による学校信頼水準を把握する方法
第 6 回　信頼を構築する組織体制
第 7 回　信頼構築のための学校・学年・学級戦略
第 8 回　保護者対応の基本
第 9 回　情報開示
第 10 回　気になる保護者への対応
第 11 回　保護者からの訴えへの対応
第 12 回　緊急時・危機対応時の保護者対応
第 13 回　特別支援教育の保護者対応
第 14 回　外部機関との連携・資源の活用
第 15 回　まとめ

Ⅳ．授業構成

前半（第 2 ～ 9 回）と後半（第 10 ～ 15 回）では、1 時間の授業構成が異なる。

前半は、①教師によるパワーポイントを用いての説明（60 分）、②ワークシートの整理（5 分）、③グループ内協議（4 名程度のグループ 15 分）、④全体協議（10 分）の構成をとっている。教師の話を聞くだけでは学習内容の習得は困難であり、他者との対話を通して学習の深化が図られることを期待している。

後半は、事前の学習課題（テキストの予習）に基づき、テキストの記述において関心をもったこと、自分が考察したこと等を各受講者が出し合い、90 分間、演習・協議を実施した。ただし、ダラダラと話し合うだけではなく、実践を志向したワークシートを用意し、適宜、それに取り組む時間も用意した。保護者との連絡の取り方、授業参観、個人懇談、学級懇談会のポイント等、学級経営をテーマとしたワークシートである。

Ⅴ．学習成果のまとめ

冬休みの宿題として、附属小学校で経験したクラスをイメージして学級通信を作成させた。自分の学級経営ビジョンは何か、自分は何を伝えたいのか、何を伝えることが必要なのか、どのように伝えれば良いのか、子どもや保護者の高需要情報は何か等、学級通信づくりにも様々な視点とアイデアがあることを、模擬体験を通して学習した。

また、最終レポートとしては、『信頼でつながる保護者対応』を模して、Q&A 方式の本をみんなで作成した。全 30 頁程度の小さな冊子であるが、半年間の学習内容とその成果が凝縮された 1 冊となっている（図参照）。

Ⅵ．授業評価

授業評価では、①特に関心を持った点、②もっと知りたいと思うこと、③自分の取組の自己反省、④授業改善の提案の 4 点について、自由記述で質問した。

①関心を持った点としては、「様々なデータにおいて保護者との対話の重要性が示されていたこと」「クローズスタイルでは失敗し、オープスタイルによって成功すること」「学力向上と信頼構築が結びついていること」「モンスターは実は怖い人ではなく、極度の困難を抱えた人であること」「保護者をいくつかのカテゴリーに分けて考えることの重要性」「苦情への効果的な対処の仕方」等があげられている。

②もっと知りたいと思うこととしては、「保護者対応の実践例、特に失敗例」「放任の保護者への対処方法」「PTA の活性化」「より詳細な苦情の内容」「保護者からよく来る相談内容」「効果的な学級懇談会の方法」等である。

③自分の取組の自己反省については、「自分がその立場であれば、ということを常に考えて授業に臨んだ」「自分の意見と他者の意見を常に比較しながら、考えを深めた」「家での予習やレポート作成にも、かなり力を入れ、よい作品をつくることができた」等の術があった。

④授業改善への提案では、「写真や映像が少なかったので、イメージがわきにくい」「学級通信のモデルを示して欲しかった」「ワークシートの記入欄が狭い」「テキストは似たような内容が多いため、もっと多様な視点から情報を提供して欲しい」「『信頼でつながる保護者対応』を活用する時間を増やして欲しい」等である。

Ⅶ．授業改善

授業評価の指摘を受け、次年度以降、次の 3 点を改善したい。

①前半と後半の授業時数を同等にする。学生は、実践的内容の学習に関心を持っている。前半の理論編は、自分の研究内容を紹介することに少し力を入れすぎた。

②前半で使用しているワークシートの改訂。現在、A4 版を使用しているが、次年度は B4 版に拡張する。

③写真や映像の提示。保護者や地域との信頼構築は、それを体験していない学生にとってはイメージの形成が困難である。写真や動画を使用することで、より具体的なイメージを持たせたい。